

1P19

親子の絆づくりプログラム「赤ちゃんがきた！」オンライン版の開発

原田 大輔¹、阪本 夏子¹、木村 美貴子²、
福西 志登美²、北林 愛理³、倉谷 千尋³、
中野 真由⁴、柏木 博子¹、石浦 嘉人¹、鈴木 志帆⁵、
浦上 友江^{3,4}、大八木 知史⁶、山田 寛之¹

¹地域医療機能推進機構 (JCHO) 大阪病院 小児科
²地域医療機能推進機構 (JCHO) 大阪病院 小児病棟
³地域医療機能推進機構 (JCHO) 大阪病院 NICU
⁴地域医療機能推進機構 (JCHO) 大阪病院 産科病棟
⁵地域医療機能推進機構 (JCHO) 大阪病院 小児科外来
⁶地域医療機能推進機構 (JCHO) 大阪病院 産婦人科

【背景】

親子の絆づくりプログラム“赤ちゃんがきた！”(BP: Baby Program)は、生後2~5か月の第1子を子育て中の母親を対象にした参加者中心型の子育て支援プログラムである。しかし、2020年度以降は新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から集団でのプログラム遂行に困難を生じている。

【目的】

BPの「オンライン版」を開発する。

【方法】

BPはファシリテーターの技量に依存しないように、全プログラム内容が固定されている。BPを開発・運営しているNPO法人こころの子育てインターねっと関西と連携してプログラムを詳細に検討し、Web上で実施可能な内容に変更した。2020年7~9月に当院で第1子を出産した母親73名を対象に参加募集した(定員10名)。全対象者にプログラム前後にアンケート調査を行った。本研究はJCHO大阪病院医学倫理委員会で承認されている。

【結果】

Web会議システムは参加者を小グループに分けられるZoomを使用した。オンライン版では全体の所要時間は変えず、通常の対面版より参加者どうしが会話する時間を増やした。脱落はなく参加者10名全員がプログラムを完了した。対象者全員への調査では、ネット使用機器の所有率はスマートフォン100%、パソコンやタブレットのいずれかが80%であった。初対面の人とWeb上での会話に「抵抗感がある」が67%、Web会議システムの「使用経験がない」が37%であった。BPのオンライン化は92%が「よい」と回答した。オンライン版BP参加者10名のうち、3名がZoomの使用経験がなかったが、回線の不具合があった1名を除く9名が機械操作は「簡単だった」と答えた。全員がBPに参加して「よかった」、BPを「他の母親にも勧めたい」と答えた。

【考察と結論】

BPのオンライン版を開発した。対象者の多くはWeb上での会話に抵抗感はあるものの、BPのオンライン化に肯定的であった。また、すべての母親がネット環境を持っており、課題は残るものの機械操作に大きな問題はないと考えられた。オンライン版BPでも参加者の満足度は十分得られており、新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、参加者に安全にプログラムを届ける有効な手段である。今後全国の自治体を中心としたBP主催団体に広めることにより、多くの母親の参加が待たれる。

1P20

地域母子保健事業の挑戦ーフォローアップ調査から見た30分の親支援プログラム「どれみプログラム」の効果ー

眞崎 由香、中島 美那子

茨城キリスト教大学

【目的】

現代の母親は、養育環境の変化により孤独感を抱えながら子育てに励んでいる。自分に自信がもてずに育児不安を強める母親も少なくない。こうした現状の解決のために、わが国ではカナダで開発された親支援プログラム「ノーバディーズ・パーフェクト (NP)」が実施されている。本研究ではNPの手法を取り入れ、短時間で実施することができ、地域の子育て中の全ての家庭の参加が望めるプログラムを開発し、実施した。今回の学会発表では、プログラムに参加した母親を対象にフォローアップ調査を行った結果から、その効果を検討する。

【方法】

2018年4月から2019年3月にA県B市の子育て世代包括支援センターにて毎月実施されている「7か月児健康相談」の終了後30分を利用し、プログラムを実施した(参加は母親151名)。そして、児が成長し「1歳6か月児健康診査」を受診された際に、プログラムに参加された母親を対象にフォローアップ調査(回答者100名)を行った。倫理的配慮として、書面および口頭で研究協力を依頼し、参加意志のある者に対しプログラムおよび調査を実施した。本研究に関連し、開示すべきCOI関係にある企業等はない。

【結果】

フォローアップ調査の結果から、プログラム参加後に連絡先を交換した人が「いた」と回答した者は9.0%、プログラム参加後に挨拶を交わした人が「いる」と回答した者は35.0%、実際に交流をした人が「いる」と回答した者は7.0%であった。今後声をかけられたら嬉しいと思うかについては「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した者は90.0%であった。子育てに変化があったかについては「とてもそう思う」「まあそう思う」と回答した者が18.0%であり、「他のお母さんとお話していたことを思い出して(子育ての知恵等)、実践してみた」等の記述があった。感想として「他のママたちが『私と同じなんだ』ということを知り、共感を持てることで、悩みを減らせたり、新しい視点を持てたりするいい機会だった。今後もやってほしい」等の記述があった。

【考察】

構造化されたプログラムで語り合うことで自己や他者への信頼感が生まれ、終了後も関係性を大切に、子育てへの意識や態度に良好な変化をもたらす傾向が見られた。こうした機会を定期的に設けることにより、地域の母親の関係性を強め、子育てへの前向きな姿勢を支えることができる。と推察する。